

浮世草子と教訓：其磧の気質物・町人物と『当世誰が身の上』

倉員，正江

<https://doi.org/10.15017/4741882>

出版情報：雅俗. 5, pp.10-13, 1998-01-10. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



浮世草子と教訓

——其磧の気質物・町人物と『当世誰が身の上』——

倉員 正江

一 気質物の教訓性

浄土宗の談義僧静観坊好阿は、『当世下手談義』（宝暦二年刊）序で、益軒教訓書と其磧の気質物を併称し、「大惣蔵書目録」を繙けば、第十五冊に、「西鶴」「艶（好色本）」「八文字屋（主に長編時代物）」、別に「浮世教訓」なる名称で、「気質物」と町人物系統の浮世草子が掲載される。目録は明治期の作成だが、江戸時代のニーズを反映している。この「浮世教訓」中に、涼花堂斧磨作『当世誰が身の上』（宝永七年正月刊・正徳五年正月再印／大本六卷六冊）が含まれる。序文に言う如く、山岡元隣の仮名草子『他我身の上』（明暦三年刊）を意識した、西鶴町人物風の出世・没落譚である。

二 『世間子息気質』と『当世誰が身の上』

其磧名を明記し、自作の旨を強調した『世間子息気質』（正徳五年秋自序刊）は、気質物の嚆矢として文学史上に名を残す。序文は明かに『本朝二十不孝』を意識し、西鶴剽窃の大部分が『二十不孝』『日本永代蔵』に出ること（長谷川強氏『浮世草子の研究』第二章第四節）や、益軒教訓書等の影響が従来指摘されている（堤邦彦氏『『世間子息気質』成立の背景』『芸文研究』43）。これを否定すべくもないが、本書の成立に直接の影響を与えた作として、前掲『誰が身の上』を検討したい。外題添書きに「身は末代の品鏡」とあり、巻末に「風流世の人心」（六冊）を予告、これは未刊と思われる。西鶴亜流の

好色物に手を染めた俳諧師は少なくなかったが、大坂住の雑俳点者山本斧麿は、町人物系を継承しようと試み、教訓的言辭を多用する。当時好評であったと見え、『子息氣質』刊行年に再印されていることも、其蹟を刺激した可能性が強い。以下具体的に影響關係を指摘する。

『子息氣質』冒頭章「木賊売は心を磨正直な百姓形氣」は、子供のいない木賊売に、産宮の小坊主が今時の子育ての様相を説くが、明かに『誰が身の上』巻一の三「上々吉箱入の銀持」冒頭箇所による。息子の教育に甘い父を描写した箇所を比較する（以下上段其蹟作、下段『誰が身の上』の引用、濁点適宜補う）。

其親の叔父たる人見かねて、尤そなたの子は発明などはいひながら。むかしから走馬にも鞭といへば。ちと折くは行義をなをされよと身の中とて心をつくるに。皆迄仰られな。惣じておさなひ時に躰をおしゆれば入

去智者のいへる我あたりの童の不行義なるに折檻をもせざる親の心を尋ねければ。幼少の時に礼をおしゆれば。入目に成て虫病や発るらん。只ありたきまゝに育。骨身もかたまりて異見をくはふべしと思へり。以ての外の

目に成て病つき。虫など出て後々迄の煩ひとなれば。幼少の時は息災なを勝にして。ありたきまゝにそだて骨身もかたまり。物の心もわきまへる時分より。万の事をおしゆればよくがてんし。異見もよくきゝ入る物なりと。それなりけりにそだてあげて。後には持あまして勘当する事は皆親のがぞかし。木竹をつくるにも若き内よりそろく揉つかれば思ふごとくなれり。ひねて後ためんとすれば枝おれ枯しほむがごとし。又其子成人しておのれとはづかしき事をしり。悪曲をなをさんとすれば物うく。元気をへらし或は窮屈にて癆

不覚悟なり。それ人の子は胎教とて腹にやどるよりあしき物くはず。悪敷事見ず聞ず。起居までよく謹時は姿美しく。才智人にすぐるゝとの教なり。

木竹をつくるにも若き内よりそろく揉付れば。思ふごとく成り。ひねて後ためんとすれば枝を枯しほむがごとし。又其子成人して己と恥かしき事をしり悪しき曲をなをさんとすれば物浮元気をへらし或は窮屈にて癆瘵と成事女子は勿論なり。

療^{かた}となり。親よりさきだち

父母一生の思ひとなれり。

又おのれと発起^{はつき}もせず異見^{いけん}

をももちいざる時は。親は

怒子^{いかりこ}は恨みたがひに憤り悪

人となつて。家をうしなひ

身をほろぼす人おほし。お

よそ世界^{せかい}のあく人親のしわ

ざならずして。誰^{たれ}がわざと

いふべき。

其磧^{しき}は後に『善惡身持扇』(三卷三冊／享保十五年刊・

明和二年『万福富貴自在』と改題刊行)中巻一「雀百に

なれど躍忘れぬ」にも同一箇所を利用しており、こちら

は「胎教」に言及するなど、より『誰が身の上』の本文

に近い。本書は其磧^{しき}の座右の書であり続けた。

また『子息氣質』最終章「福人になる世倅^{たふご}が身の未知

ぬ占形氣」も、『誰が身の上』巻四の二「足事^{たふこと}を知る裸

長者」に拠る表現が見られる。

其身善果^{ぜんぐわ}なくしてはいかほ一但シかくいへばとて貧者^{ひんじや}が

亦^{また}己^{そのれ}と発起^{はつき}もせず。異見^{いけん}を

も用ひざるときは親^{をや}は怒子^{いかりこ}

は恨み。互^{たが}ひに憤り悪人^{あくにん}と

成て命をしどめ身を亡^{ほろ}ぼし

終に樂^{たの}しき心なく相果^{あひはつ}るぞ

かし。凡^{をよそ}世界^{せかい}の悪人親の仕

わざならずして誰^{たれ}かわざと

かいふべき

どねがひいのりても。貧者^{ひんじや}

が俄^{にはか}に福者^{ふくじや}にはならぬもの

なり。貧福^{ひんふく}は天地の道具に

て。駕籠^{かご}に乗る福者^{ふくじや}あつて。

是を昇^{かき}貧者^{ひんじや}なくては世界^{かい}は

立がたし。硯^{すずり}になる石あれ

ば火打になる石もあり。い

づれも石の役はつとむるぞ

かし。人もそのごとく銘^{めい}

々の役をつとめ死するが人

なり。

其磧^{しき}は後に町人物『商人家職訓』(外題『家職訓』五

卷五冊／享保七年刊)巻四の二「手代が力でねぢ直した

旦那の身代」冒頭にも、同一箇所を利用する。

三 『家職訓』の教訓

『家職訓』は、其磧^{しき}の浮世草子には珍しい半紙本形で、益軒や西川如見の教訓書の盛行を意識している(『八文字屋本全集』8拙稿解題参照)。巻三の一「手代が減す

福者^{ふくじや}になるには不^{あらず}貧^{ひん}福^{ふく}は

天地^{だうぐ}の道具にて。駕籠^{かご}に乗

る貴人^{きじん}有て。是を昇^{かき}賤者^{せんじや}な

くては。世界^{せかい}は立難^{たがた}し硯^{すずり}に

成^なる石もあり火打に成^なる石も

あり何れも石の役は勤^{とむ}る也

人も其ごとく銘^{めい}々の役を勤^{とむ}

め死するが人なり。富^{とみ}るを

うらやみ。我^{われ}わざと飽果^{あきはて}疎^そ

略^{りやく}なるは役^{やく}にたゞずといふ

なり。

私金鍛冶屋が延す細工の銀」も『誰が身の上』巻二の二「袋を通す難波の芦鉾」による。

商売は草の種何をか上りと
し何をか下りとせん阿膠を
用ひて墨をねり毛をねぶつ
て筆を造りていづれも貴人
の御手にふれらるゝ呉服物
蚕糞なり両替の金銀何者の
手より出けん葉やに人支阿
膠童便製の葉あり凡木を削
て箱とし鉄をきたいて剣と
す是等は清浄の業なり剣は
何ぞ鍛冶の職なり容を荘ら
ざれば賤しき業のやうに思
ひてうぬが子のつとむる両
替を自慢して人の子の鍛冶
屋に居るをそしれるは慮外
千万むかしより知行官位を
給はる鍛冶は多く取込して
倒れ手鉄うたるゝ両替は世

商売は草の種何をか上りと
し何をか下りとせん只少の
道理を以て位を分るのみな
らん。阿膠を用ひて墨をね
り毛を用て筆を作りて何れ
も貴人の御手にふれらるゝ
服物かいこの糞也両替の金
銀何者の手より出けん葉屋
に人支あり。凡木をけづり
て箱とし鉄をきたいて剣と
す。此等は清浄の業なり。
殊に太平の御代をあがめて
剣を箱に納むといへり。剣
はなんぞや鍛冶の職也箱は
なんぞや指物屋の工なり容
を荘らざれば賤敷業のやう
に思ひて宜しからぬ世渡す
る身より人がいへばとて。

にありたゞ人は身の端正を
磨かんより心のきらを磨べ
し：（中略）：主取の善悪
を吟味し家職の撰嫌ひする
手間でののが子の性を見す
へ勤が心太く大胆なるむま
れつきならばきびしく折檻
してすいぶんだゞるせぬい
そがしき商売屋の強親方に
つとめさすべし

箱屋の二、さう鍛冶の三、さう
などゝいへるは慮外千万の
事なり此心より弟子奉公に
出す親。家業を撰嫌ひする
事多し。知行官位を給る鍛
冶は多く側れて。手錠打た
れぬ両替は無数事を見ざる
成べし只身の端正を磨かん
より心のきらを磨べし。

『誰が身の上』は、其積作品の構想自体に影響を与え
た箇所もあるが、紙数の都合で省略する。

総じて「浮世教訓」型の浮世草子は、改題本も含めて
刷りを重ねていることは注目すべきである。『誰が身の上』も無刊記後印本の他、『人間一生盛衰記』一名誰が身の上（外題）と改題され、弘化三年・嘉永三年に刊行された。見返に「八文字屋自笑作」とあるのは皮肉であるが、幕末まで命脈を保った事実を見直してよからう。